

erudio 9

国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター通信 2008.11

Iwate University : University Education Center

Contents

副センター長より	2
部門長	3
全学共通教育分科会	5
運営委員会	8
入試部門	9
全学共通教育企画・実施部門	10
教育評価・改善部門	12
専門教育関係連絡調整部門	14
学生生活支援部門	15
キャリア支援部門	16
全学共通教育の理念と教育目標	17
授業実施報告	18
新規授業開講	19
現代GP	20
アイアシスタント&匠の技	21
委員会及部門会議名簿	22

副センター長より



さとう
佐藤 潤

副センター長
全学共通教育企画・実施部門 部門長
(教授 工学部専任担当)

「一体感のある岩手大学へ」 —大学教育総合センターの役割—

国立大学法人を取り巻く環境はますますその厳しさを増しております。そのような中、中央教育審議会から間もなく発表されるいわゆる中教審答申によると学士力の養成が強く求められております。各大学の教養教育の充実とともに大学教育における単位の実質化による質の保証が盛り込まれ、豊かな教養を備えた学士の育成こそが求められております。言い換えれば、十分な社会常識と幅広い学際的な教養を備えた学士の養成が求められております。大学教育においては大綱化以降、専門教育に偏りがちでしたが、幅広い教養型教育への転換が求められております。また、4月に改正された大学設置基準では各大学にFD活動の実質化を義務化付けております。学生への教育の質の保証を約束するためには、大学教員の指導力の向上が不可欠であることを明確にしております。

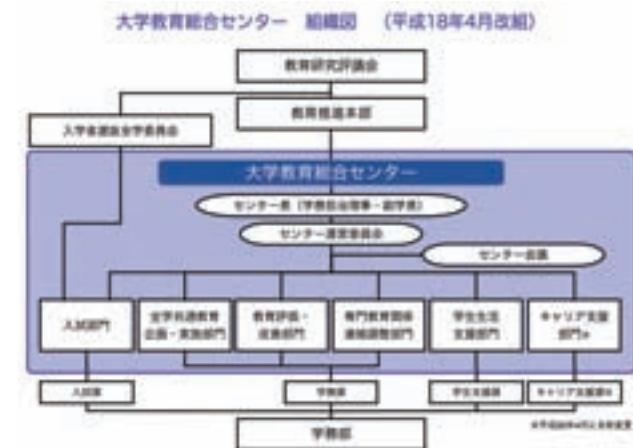
大学教育センターからの改組を経て、大学教育総合センターはこれまで全学共通教育の改善に努力してきました。人文社会科学部の共通教育実施の役割は、基本的に変化はないものの、岩手大学の全教員による共通教育の運営と分科会への所属による共通教育科目の実施が実質的に行われるようになり、全教員担当体制が整いました。しかし、現状はなかなか厳しく、担当教員の多忙化とともに、教員の削減により、共通教育のための教員確保は困難な状況になっております。このことはひいては共通教育の崩壊を懸念させます。教養教育の充実が求められている状況を踏まえるならば、大学人が英知を結集し、その維持に努めなければなりません。

大学教育総合センターでは現在副専攻制度の導入、基礎ゼミナールのさらなる改善および発展ゼミナールの導入による教養教育の充実を提案しております。多様な入試方法によって選抜されて入学する岩手大学生もまた多様です。岩手大学の学生がこれらの副専攻制度と基礎ゼミナールなどにより幅広い教養を身に付け、岩手大学での一体感のある学びを実感できるようにすることを目指しております。

大学教育総合センターの部門長は本年4月から4学部の兼務教員で構成され、全学の協力による大学教育総合センターの運営体制が整いました。一体感のある岩手大学へと新たな飛躍が期待されます。そのためにはもちろん大学教育総合センターが岩手大学の全教員から信頼される組織であることがまず前提です。

藤井克己新学長はその就任挨拶の中で「幅広い教養と学力を有し、高い専門的能力を備えた人材の育成と国際的な水準の優れた研究成果の積極的発信を目標とする」ことを明言しております。これは本学が学生、教員、職員および地域とともに一体となってその共生に努力することを表明したものです。いまこそ「一体感のある岩手大学」の実現が求められております。

大学教育総合センターの兼務教員(副センター長、全学共通教育企画・実施部門長)に本年4月に就任以来、これらのこと目標に全学の教員の皆さんと共にその職務の遂行に努力したいと思います。





後藤 尚人

教育評価・改善部門長
(准教授 人文社会科学部専任担当)



村上 祐

専門教育関係連絡調整部門長
(教授 教育学部専任担当)

erudio5号に、総合センターへの改組を期に部門を横滑りして云々と書いてはや2年が経ちました。引き続きご厄介になるというか、居座り組になって第3期5~6年目がスタートします。

教育評価・改善部門の主な任務は、

*教育評価活動

→ 学生による授業評価や教員自己評価の支援

*FD活動

→ 教育改善のための組織的取組支援

→ 教育方法等の調査・開発

→ 教育改善のための提言・提案

*センター通信や年次報告書の編集・発行

などです。

とりわけFDに関しては、大学院設置基準の改正(H19年4月)と大学設置基準の改正(H20年4月)により、「授業の内容及び(研究指導の内容及び)方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施する」【括弧内は大学院設置基準のみに表記】と規定されたことで、その重要性が増しています。

このFDの義務化に対応するため、本部門では昨年度末に「岩手大学FDプラン(案)」を取りまとめ、運営委員会へ申し、本年度からその実施に関わる作業が進められています。

「授業公開と授業参観の実施方策について」という学内文書にも記しているように、今後は教員相互の研修・研鑽型FD活動が求められますので、構成員の自立的協働に期待つつ、皆さまのご協力をお願いします。

また、アイアシスタントの開発・稼働のためのプロジェクトが一段落し、本年度から教授技術「匠の技」伝承プロジェクトがスタートしました。

さらに、いわて高等教育コンソーシアムに関わるプロジェクトが戦略的大学連携支援事業に採択されたことから、いわて5大学関連の業務にも関わることとなり、大学教育総合センターの役割がさらに重みを増すことになります。皆さまのご協力を重ねてお願いする次第です。

この4月より専門教育関係連絡調整部門長になりました村上です。長いこと教育学部の学務・教務に携わってきた関係で、教養課程廃止から大学教育センター立ち上げ(200404年)に至るまで全学共通教育の改革にも関わってきました。この度、「先生の残りの2年間を全学の教育改革のためにいただけませんか」と玉理事・副学長(大学教育総合センター長)からお声をかけていただき、自分のなかで意欲・体力とも相談して、お引き受けすることとしました。

さて、本部門の主たる任務は「全学共通教育と専門教育の連携」と「複数学部にまたがる専門基礎教育の連絡・調整」です(「複数学部にまたがる教職科目の連絡・調整」も任務の一つでしたが、岩手大学教員養成機構設置後、そちらに移りました。)。このうち、専門基礎教育に関しては、2000年の全学改革の際に共通教育科目から専門教育科目へ変更したことに端を発して、講義担当者の問題が学部の教員配置数等の問題に発展してかなり紛糾しました。その後玉センター長の尽力により学部間の意思疎通が進みましたが、今年6月の科目別懇談会の場でもその名残が感じられ、今もって完全に合意に至っていないようです。

しかし、大学法人化以降の運営費交付金の継続的削減や人件費5%削減、あるいは教育支援センターへの配置換え等で、学部の教員数が減らされてきており(特に人文社会科学部と教育学部が著しい)、もはや1学部だけでは教育の質を保てない状況になっていると思います。さらに、「学士課程教育の構築へ向けて」(中教審、本年3月)や「教育振興基本計画」(文科省、本年7月)など、矢継ぎ早に出される教育政策に取り組む(あるいは立ち向かう)ためにも、全学の教員が力を合わせる必要があります。この意味から本部門の役割はますます重要になってくると思われ、私に残された時間、微力ながらこれに貢献したいと思っております。よろしくお願ひ致します。

部門長より



おがわら よし ぶみ
小笠原 義文

学生生活支援部門長
(教授 教育学部専任担当)

岩手大学卒業生として有能な人材に巣立って欲しいことを願いながら、有意義な修学生活を応援する学生生活支援部門を担当しています。

学生生活支援部門の主な任務は、学生への広報活動、授業料免除、課外活動施設に関する事務、学生寮への入寮、ボランティア活動そして奨学金貸与などの審査や選考そして推薦することなどが挙げられます。教育・学生担当理事を囲んで、学生たちと昼食をとりながら意見交換する「ガンチョンタイム」が随時開催されていますが、学生たちの声を直に聞く機会もあります。また、学生議会でも学内の修学環境に対して積極的な発言を見聞きしましたが、それらの意見や要望についても部門内で充分協議し対応していくことも任務となります。学生生活支援をするいろいろな場面において、学生たちの人間形成にとってこの部門が果たす役割は重要ですが、学生たちのために部門の一員として相努めたいと思います。

マス・メディアにおいて、大学生に関するニュースを今まで以上に注目し関心を持つようになりました。特に岩手大学生の明るいニュースや活躍していることを知ることは、学生生活支援部門の立場上大変嬉しく思います。スポーツ関連記事は勿論のこと、全国紙に掲載された地域の踊りを極めている「民俗芸能サークル・ばっけ」の活躍報道やLet'sびぎんプロジェクトに選出された「鳥人間コンテスト選手権大会」に出場したグループの代表が新聞記事に取り上げられるなど、学友会所属サークルの活躍は、活気が伝わり元気をもらうと同時に頼もしく感じています。

学生たちとの距離を身近に保ちながら、可能な限りより良いキャンパスライフを支援したいと思います。



みわ はじめ
三輪 弘美

キャリア支援部門長
(教授 農学部専任担当)

キャリア支援・キャリア形成という言葉はなかったけど、大学生活でのそれは何だったろう。大学に入学して、勉強そっちのけでバレーボールに明け暮れていたら、大学紛争の大波をまともにかぶって右往左往し、大学教授の無能さといい加減さに気づかされました。でも、苦しい立場にいながら研究者として誇りをもってすごい仕事をする人にも出会え、自分の目標を見つけられました。それが自分にとってのキャリア形成だったのだと感じます。

岩手大学には4つの学部があり、それぞれ専門性が異なり、教育の目的・目標がちがっています。それらの文系・理系4学部が1つのキャンパスに集っていることは非常に大事なことです。東北一円だけでなく、日本全国、さらに広く海外からも学生が集まる事、また教員の出身地も多彩であることが、社会を見る目を豊かにしてくれています。世界から見れば、こんなに狭い日本なのに、関西人と東北人はなぜこんなにちがっているのか、東北と言っても地域差もあり、さらに個人の個性の差は計り知れなく大きい。そんなことを4年間の学生生活で実感できることが、社会に出てから活躍していく上でどんなにか役に立つことでしょう。

就職支援部門からキャリア支援部門に変わったことは、大きな意味があります。就職と言うのは、学生にとって大きな決断ですが、就職先を選択していく過程で、実は自分の人生設計を考え、生きていく目標を探しているわけです。結局は、学生が自分で考え、悩み、決断していくしかないのですが、そのキャリア形成を応援していくことがキャリア支援部門の役割だと思います。学生たちの人生の選択肢を広げる意味で、就職先を開拓することは大切な仕事です。社会はどんな人材を求めているか、広く意見を求めている作業も欠かせません。そして、学生たちには、就職活動のテクニックやノウハウだけを学ぶのではなく、自分のキャリア形成という視点で就職活動をとらえ、見通すことの重要さを知ってもらいたいと思います。

全学共通教育分科会

「外国語」分科会

代表 海老澤 君夫(教授 人文社会科学部専任担当)

先日ある情報交換会に出る機会がありましたが、その時に岩手大学の共通教育は他と比べても成功している方では、という印象をもちました。実際にそうかどうかは簡単に言えないでしょうが、いずれにせよその印象の大きな根拠は、ここの大学教育総合センターはうまく機能している方かもしれないと思ったことです。

さて外国語の分野ですが、ここではそれまで履修上の大きな原則だった「2外国語必修」に対し、昨年度新たに「1外国語週4回の、(さらに希望により前期後期同じ外国語の)集中授業」という別のベクトルを持つ原則が加わりました。その結果外国語の履修形態はこの二つの間で、かなりバラエティーに富むものとなりました。履修者にとって選択は多くの場合入学前になるのですが、目の前にメニューが多くあれば、選択の際に考えることも今までよりは多くなることでしょう。これが授業への積極的要求とか教師側の要求への活発な反応につながっていけばいいと思っています。

「健康・スポーツ」分科会

代表 小笠原 義文(教授 教育学部専任担当)

昭和44年に建築された岩手大学第一体育館は、昨年の耐震工事改修に続いて、今年度はアリーナ(床)等の老朽化に伴う改修工事が進行中です。長年の使用で、固定金具の破損や床から突起物が出ている箇所、床材が割れている部分などもあって安全面において懸念していました。財源を財形センター交付金で年度当初事業に組み込まれ予算化されました。工事はアリーナ(床)の全面張り替えとともに、固定金具等の新設、器具室やトレーニング室そして事務室も新しくなります。

健康・スポーツ科目的各授業終了時には、床をより良い状態に維持するため、交代でモップ掛けを実施しています。今後も継続し習慣化していくことが必要です。

体育館使用頻度も高く、新装成った第一体育館で充実した授業が展開できることを期待しています。

「情報基礎」分科会

代表 鈴木 正幸(准教授 工学部専任担当)

私、分科会活動も情報基礎の講義経験もないまま代表を引き受けてしまいました。分科会運営の引き継ぎもないまま、分科会の課題は降りかかってきます。就任したからには、責任を果たしたいと思っています。特に分科会の皆様、協力よろしくお願いします。

代表としてやりたいことは、「講義内容の検討」と「技術を用いた分科会活動」です。

情報基礎は、コンピュータリテラシと情報リテラシを、技術(コンピュータとインターネット)を用いて教える講義だと考えます。分科会会議を開催し、講義内容について議論しました。情報リテラシに関する講義内容が確立されておらず、教える側の勉強も必要のようです。

「技術を用いた分科会活動」では、所属や立場の異なる教員が、共通の分科会活動をしていくために、「共通・共有の場」が必要と考え、まずは、代表としての活動(シラバス一覧、活動・会議記録)を下記の URL で公開しました。

<http://www.os.cis.iwate-u.ac.jp/~suzuki/johokiso/wikky.cgi>

今後、会員の皆様の賛同が得られれば、分科会のサーバとWebサイトを立ち上げ、講義コンテンツの共有、コースウェアの実験などを通して、技術を用いた講義をサポートできればと考えています。

よろしくお願いします。

「思想と文化」分科会

代表 小林 瞳(准教授 人文社会科学部専任担当)

今年度で2期5年目の全学共通教育企画・実施部門兼務教員となります。平成19年度に行なわれた分科会の再編によって、分科会「人間と文化」が、「心と表象」および「思想と文化」へと細分化され、後者の代表を務めさせて頂いています。

この分科会の再編によって、構成メンバーの人数が減り、当分科会の規模はより適正なものとなったと思います。班代表としては、このような変化に対応して、より機動的な分科会活動ができるよう、心がけていかなければならぬ、そう考えています。

全学共通教育分科会

「心と表象」分科会

代表 松岡 和生(教授 人文社会科学部専任担当)

全学共通教育では評価基準のガイドラインなどの設置を含め成績評価の厳密化への取り組みが求められています。そのなかでTeaching Assistant (TA) 制度にはずいぶん助かっています。150名以上の受講生がいる講義に院生TA1人がつくことになっており、「心と表象」分科会でも多くの教員がこの制度を活用しています。受講生の多い授業において、レスポンスカード、出欠そして課題の整理等、成績評価の作業には欠かせない存在です。多くの教員がTAを活用できるよう利用条件の緩和をお願いしたいところです。

アイアシスタントの導入が教員の教育活動におそらく大きな変化をもたらすことに、実は最近気がつきました。シラバス機能のほか授業の管理・記録にも利用でき、アンケートの作成や集計等もできてしまいます。休講届けなどの事務連絡の機能も追加されました。学生とのコミュニケーションツールとして、使い方次第では大きな可能性を感じています。ただ私自身に関して言えば、いまだ十分に活用しているとは言えず、進化し続ける教育システムへの「適応」が今後の課題になっております。

「公共社会」分科会

代表 丸山 仁(教授 人文社会科学部専任担当)

26年前の春、一人の小柄な銀髪の紳士が、つかつかと教室に入るなり英語で黒板にこう書いた。「君たちは政治から目を背けることができる。しかし政治は決して君たちをつかんで放さない」。教養の政治学の授業、おそらくは初日であったと思う。今でも印象に残る一幕である。

本来大学における教養科目は、まずもって豊饒な知の世界、すなわち「学びの銀河」とのファースト・コンタクトの場であり、専門科目以上に予期せぬ出会いと発見に満ちあふれているべきであろう。もちろん単に多彩な、また多数の科目を漫然と並べることが豊饒さを用意するわけではない。岩手大学は「持続可能な社会」を道標として選択した。その道標をどこかで共有しつつ、現代社会という土俵の上で、一つでも二つでも学生の胸に響くような学びの場を提供していくこと、それが「公共社会」分科会に与えられた使命であろう。

「現代の諸問題」分科会

代表 岡崎 正道(教授 国際交流センター専任担当)

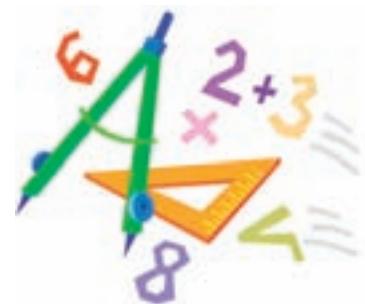
当分科会の代表として一体何ができるかと考えたが、小生の能力・性格からすると、どうも何もできそうにない。それゆえ「代表としての抱負を」などと言われても困るのであるが、最近の学生と大学に対する印象についての独断的私見を綴ることで、これに代えたい。

まず最近の学生についての感想を率直に言うと、(岩大生に限るまいが)何かちまちまとまりすぎている者が多いように感じる。敷かれたレールの上に乗って、そこから極力逸脱しないように振る舞っているように見えるのである。それもわからなくはないが、若いのだからもっと馬鹿をやり、大いに軌道からはみ出したらいいと思う。

不肖私めなど、大学時代の生活は相当に無軌道であった。「過激派」の学生と付き合い、くだらぬ授業はサボって昼から麻雀に没頭し、夜はネオンの巷を彷徨する。何日も登校せず、アパートで推理小説ばかり読みふけっていた時期もある。「無頼派」を気取り、アナーキーな生き方に大学生の本分を見出すような毎日であった。まあ、そのせいで大学・大学院に13年半も在籍するはめにはなったが、今思い起こしても「充実」した日々ではあった。

決して小生ばかりではない。実に個性的な学生どもが、周りにごろごろしていた。そして何より、それを許容するいい意味での「寛容さ」が大学に存在した。現在のように、やれシラバスだ、レスポンスカードだ、授業アンケートだなどと、「せこい」ことは誰も言わなかった。あの頃の時代(1970年代)を、しみじみと懐かしく思う。

念のため言うが、これは現在の大学に対する批判ではない。多分の皮肉といささかの「自戒」を含めた、中年教授のノスタルジックな繰り言である。



全学共通教育分科会

「生物の世界」分科会

代表 黒田 榮喜(教授 農学部専任担当)

「生物の世界」分科会は、人社・工学・農学部の先生によって構成され、教養科目としての『生物の世界』を担当しています。これから社会にでて生きていこうとしている理科系、文科系を問わず全ての学生に教養としての現代生物学あるいは生命科学を様々な角度から複眼的、鳥瞰的かつ総合的に概説することによって、学生が生命のしくみを日常生活と関連づけて理解し、いのちのあり方を見つめ、科学的な生命観を養うことに貢献できればと考えています。

「自然と数理の世界」分科会

代表 西崎 滋(教授 人文社会科学部専任担当)

「自然と数理の世界」分科会は、数学・物理学・化学などの自然科学の各学問分野に特有な基礎的概念や「ものの見方・考え方」の理解、ならびに、論理的な思考力の養成をめざして教養科目を準備しています。

2008年にはノーベル物理学賞および化学賞を4人の日本人研究者が受賞し、基礎科学分野での日本人研究者の実力が評価されました。数学離れ・理科離れが問題となっている時期でもありますので、そうした最先端の研究成果をはじめ、幅広く多様な数理現象・自然現象を取り上げて、基礎科学の魅力をつたえていきたいと思います。

分科会としては、これまで教養科目を担当してこられたメンバーが漸減していますので、充実した多様な授業メニューの提供を続けるために、まだ教養科目を担当されていない分科会メンバーからのご協力が必要となっています。その実現のための環境づくりに力を尽くしたいと思います。

「科学技術」分科会

代表 笠場 孝一(准教授 工学部専任担当)

現代社会の繁栄を担う様々な科学技術(例えば、ロボット、コンピュータ、エレクトロニクス、ナノテクノロジー、

新材料など)が、実際の暮らしにどのように関わっているかを先端的技術に関する話題を交えながら解説していく講義「くらしと科学技術」を開講します。これからの科学技術は、最強最善のみを目指すのではなく、例えば環境・エネルギー、資源、安全に関する問題の対処など、未来の人類共通の利益へ向かって発展させて行く必要があります。

この講義では、複数の教員がそれぞれの専門分野の視点から、その取り組みについても触れていくたいと思っています。未来の科学技術のあるべき姿、その答えは様々だと思われますが、この講義がそれを考える契機になればと思っています。工学的な内容が多いと思いますが、だからこそぜひ工学部以外の学生諸君にも聴いてもらいたいと思っています。

「環境」分科会

代表 河合 成直(教授 農学部専任担当)

今年、「環境教育科目」は講義科目数が10種類に増えました。昨年までの4つの講義を各学部で担当する体制を改め、学部横断型の5-6人ずつの教員チームを作り、基本的内容を決めて講義を行うことにしました。9月に学生に履修希望調査を行い、各講義、履修学生数130名以内を目標に学生センターの方と人数を調整しました。

「環境教育科目」は1年生を対象に、工学部の一部を除き必修科目で後期に開講されます。今年は、履修者総数が約200名増加し、約1200名が履修登録しました。予想外の履修者数の増加によりある講義では履修者数が190名近くとなり、学生数の調整の失敗を反省していますが、履修者数の増加自体は望ましいと思います。これは、環境問題の重要性に対する学生の理解の高まりによると考えたいところです。

現在、講義が始まったところですが、この講義により環境問題がより理解できたとの声が学生諸君から聞こえてくることを期待しています。

ESDのパワー

大学教育総合センター長 玉 真之介

■目標の共有化

岩手大学の「学びの銀河」プロジェクトを紹介する機会が増えています。昨年は、琉球大学、愛媛大学、今年は岩手県私学協会(8月5日)、日本科学教育学会(8月24日)、大阪大学(9月19日)。そこで強調しているのは、「目標の共有化」です。

大学は研究が個人単位、研究室単位で、行われることが多くそれが教育にも反映しています。しかし、いま求められているのは、組織的な教育、プログラムとしての教育です。そのためには、教員が自分の専門性を越えて、連携・協力しなければなりません。

それが難しいのが全学共通教育です。多くの大学で分担割当だけはルール化されていますが、授業内容は担当者任せでバラバラです。担当者も年毎交代し、持続性も希薄です。要するに、教育担当者の間で「目標の共有」がないのです。

本学の「学びの銀河」が注目されているのはその点です。「持続可能な社会づくりに主体的に参画する人間の育成」というESDの目標は、21世紀を見据えた旗印です。授業分担、授業内容で連携・協力の拠り所となります。まだ「連携・協力=負担増加」と受け取る方が少なくありませんが、「連携・協力は創造」です。

これまで連携が希薄であった幼稚園から大学までが、ESDによって連携・協力の関係ができつつあります。ESDは、これまでの分断・競争の政策に対抗する連携・協力の拠り所としての可能性を高めています。

ESDという目標の共有によって、学部間で、共通教育と専門教育の間で、連携・協力の関係をどう産み出すか。本学の教育は、そこにつながっています。鍵となるのは、副専攻です。意欲ある学生のために、学部を越えた「学びのガイドとアシスト」である副専攻をぜひ実現したいと考えています。

■「学士力」とESD

「教育分野にかかわらず共通に身に付ける学習成果」(教育振興基本計画)が、大学教育に問われることになりました。その内容は、OECDがキーコンピテンシーとして示した3つの力が核になります。

すなわち、①数量的なデータや様々な情報を処理・分析して活用できる力、②異文化の他者とでも共に協力できるコミュニケーション力、③自律した市民として行動できる力です。これらを大学のディプロマ・ポリシー「学士力」として明確にし、学部を越えて共通に身に付けさせる教育プログラムを考えていく必要があります。

この「学士力」の議論には大きな陥穰があります。それは議論が、教育の「質の保証」とだけ結びつけられ、養成する人材像との関連が希薄だということです。換言すれば、学生が身に付けた「学士力」を何に使うのかが語られていないということです。

先頃は、社会を支え改善する「21世紀型市民」の育成が学士課程教育の共通の目標と言われていたのが、今度は「学士力」が全面に出て、「21世紀型市民」との関係が語られない。どうも一貫性がありません。

本来的に、養成する人材像(「21世紀型市民」)とその人材が身につける能力は一体的に提起されねばならないはずです。これは、「21世紀型市民」の提起が言葉だけで、中身が希薄だったからです。

「持続可能な社会づくりに主体的に参画する人間」こそ「21世紀型市民」。これが本学からのメッセージです。さらに、教育分野にかかわらず共通に身に付ける学習成果もESDが目指す「育みたい力」とオーバーラップしています。その意味で、「学士力」という課題も、本学ではESDと結び合わせて検討してゆきたいと考えています。

専任教員 永野 拓矢

■はじめに

大学教育総合センター内に入試部門が設置され3年目となりました。入試部門が開設されたことで「これで岩手大学の志願者も増加するだろう」という周囲の期待には十分応えられず、昨年の志願数をようやく維持している状況ですが(ここ数年志願者は3,000名程度)少子化で受験生が減っている中での現状維持としては健闘しているのでは、と考えています。

■県内外で募集方法に工夫

岩手大学に限りませんが、志願増を妨げる一因として受験産業による「入試ランク」が挙げられます。本学各学部は東北地方では比較的上位に位置するため(どの学部も東北大学について2位にランク)「岩手大学に入りたいが、難しいので別の大学に回避した」と高校訪問の際「最後の最後で志願変更をして別大学を受験した」と進路担当の先生から聞かれます。現役志向の非常に強い東北地域、特に地元岩手においては本学志望でも最終的には「現役で合格できる国公立大学」に志願を変更することも少なくありません。「無理をしてでも、また浪人しても是非岩手大学を狙いたい」学生が増えてほしいところですが、本学はそこまでの魅力に達していないことを課題として捉え、まずは「現状の方策」として本学をより全面にアピール出来る機会を増やそうと昨年から岩手大学「単独」の大学説明会を開催しています。今年は私立岩手医科大学も一部の会場で共同開催を行い、7会場で延べ700名程度の来場がありました。

岩手大学説明会の特長は通常の学部ブースの個人相談に加え、「岩手大学全学プレゼン」を50分程度かけて行うことです。各学部の概要から就職状況、研究活動から日頃知る機会の少ない本学が立地する盛岡市内の学生アパートの住宅事情等まで様々な角度から紹介しました。来場者のアンケートからは「この方法は斬新だ」「業者説明会と全然違う」などの評価を多数頂きました。



■エキスパート講座の実施

4,5,7月の3回に分けて、岩手大学の教員、事務職員の希望者を対象に「岩手大学エキスパート講座」を入試部門にて開催しました。高校訪問時の「何を質問するか」や「来学された際の本学のアピール方法」など幅広いシチュエーションを想定してそれぞれ効果的なPR法について実施しました。参加者からは「岩手大学の良さが今更ながらわかった」「アピールの方法や高校訪問での禁忌事項が役立った」など、それぞれのおかれた立場や場面を想定したことによって効果が高まった模様です。



■AO入試の実施

入試部門の大きな業務の一つに本学AO入試の運営があります(アドミッショングループ、以下AG)。

今年で2年目となったAO入試(人文社会科学部)は定員9名に対し56名の志願がありました。初年度の昨年は71名でしたので若干減となりました。昨年の「実質倍率10倍」の課程はその反動で敬遠された模様です。

■最後に

高校訪問は欠かさず行っています。今年も年間260校程度になる見込みで広域的な営業活動を心掛けています。年1度の訪問ですが、先方も本学の来訪をよく覚えていただいていることが多く、昨年のメモを引っ張り出しながら(笑)、話の整合に努めてご案内しています。

全学共通教育企画・実施部門

部門長 佐藤 瀬

■全教員の分科会への登録

全教員の分科会への登録制度が発足して3年目を迎えました。分科会への登録制度は本学の全学共通教育科目を維持するためには、不可欠の制度です。しかしながら現状は新任の教員がその制度を必ずしも明確に認識しているとは言えません。本年4月時点で全学では約10名の先生方が未登録でした。新任教員の分科会への登録制度が明確ではありませんでしたので、各学部長あてに採用時に分科会所属を確認するようにお願いすることを大学教育総合センターから全学教育改革会議に提案しまして、直ちに実施に移されました。そこで、改めて各学部の教務関係委員会の委員長に登録を呼びかけていただきました。その結果ほぼ全員の先生方の登録を完了しました。

■高年次課題科目枠の設定

これまで、高年次課題科目の時間割枠は明確に定められておりませんでしたが、各学部の教務関係委員会の審議を経て「木曜日3-4校時」をこれに充てることで、調整が行われています。これにより教養教育のさらなる充実が期待されます。

■分科会におけるFD担当者

大学設置基準の改正により、大学のFD活動が義務化されたことを受けて、分科会におけるFD活動の実質化を目的として、各学部にFD委員会の設置をお願いしました。それとともに、本学では共通教育の各分科会にFD担当者の選任をお願いしました。その結果殆どの分科会から下に掲げましたようにFD担当者が選任され

英語を勉強しよう!

Gavin YOUNG先生(English Station)

平成20年4月より、英語教育の更なる強化を目的に、特別非常勤講師の制度を導入しました。この制度により、Gavin YOUNG先生が本学の共通教育の英語の授業と学生向けのLanguage Station(10月よりEnglish Stationに改名)を担当しています。佐藤副センター長が、この特別非常勤講師Gavin先生へインタビューを行いました。(江本)

Q.出身と日本にやってきたきっかけを教えてください。

A.アメリカオレゴン州の生まれです。日本には2005年にJICAのJETプログラム(The Japan and Teaching Program)で来日しました。

Q.岩手にはいつきましたか?またその印象はどうですか?

A.岩手には、今年の春やってきました。その前には福島の二本松で英語のインストラクターをしていました。岩手は私の故郷に似ていて、大好きです。みんなとても親切ですし、自然もすばらしい。ただ、本州一寒いところだと聞いていますので、それが少し不安です。

Q.Language Station(英会話希望学生向けの授業)を開講して、半年経ちますが、岩手大学の学生に対してどんな印象を持っていますか?

A.岩手大学の学生は、勤勉な学生が多く、また思っていたよりもずっと英語のレベルは高いと感じています。ただ、シャイな学生も多いので、勉強した成果を積極的にアウトプットしていけば、より高い学習効果が得られるのではないかと思います。

Q.語学を勉強している岩手大学の学生に何かアドバイスをお願いします。

A.英語だけに限らず、語学は一朝一夕では身に付きません。時間がかかります。まず、そこを認識して地道に勉強していくってほしいと思います。同時に、勉強する目的を見つけることが重要です。積極的に英語を使う機会を作って、自分の目標を実現してほしいと思います。

English Station
開講中!
学部学生対象 毎週木曜日 14:45~16:15 学生センター棟4F G-4C教室
大学院生対象 毎週木曜日 16:30~18:00 学生センター棟4F G-4C教室



(インタビュー日時:平成20年10月24日／インタビュアー 佐藤 瀬)

全学共通教育企画・実施部門

れました。これまで分科会代表の先生がたには共通科目の設定およびその実施につきまして多大なご協力をいただきてきましたが、今年度からはFD担当の先生方と力を合わせて共通教育の充実にお力添えをお願いしたいと考えております。

平成20年度 分科会FD担当者

外国語分科会	川本 榮三郎
健康・スポーツ分科会	浅沼 道成
情報基礎分科会	鈴木 正幸
思想と文化分科会	砂山 稔
心と表象分科会	松岡 和生
公共社会分科会	塙本 善弘
現代の諸問題分科会	田中 吉兵衛
生物の世界分科会	横井 修司
自然と数理の世界分科会	大西 良博
科学技術分科会	笠場 孝一
環境分科会	梶原 昌五

■編入学生の外国語履修基準の見直し

近年、入学学生の多様化とともに編入学生もその出身学校等により多様化しております。そのため編入学生の外国語の履修も様々で、既習外国語の内容が一律ではありません。極端な場合は外国語の既習単位がゼロである学生も編入します。そのような編入学生に対応するための履修基準の設定を各学部に検討をお願いして、学部毎に履修基準を定めることができました。この基準は21年度に編入学する学生に適用されます。

■発展ゼミの新設

工学部、農学部では、基礎ゼミの実施から2年目を迎え、その充実が求められておりますが、その一環として大学教育総合センターでは発展ゼミの新設を提案しております。これは基礎ゼミが導入教育の初めと位置付けられるならば、発展ゼミはその進展教育と位置付けられるものです。真に豊かな教養を身につけるためにゼミ形式の発展ゼミを実施しようとするものです。発展ゼミの実施については各学部から様々な意見が寄せられておりまことから、大学教育総合センターとしても十分に資料を整えて実施に向けて準備したいと考えております。

■総合科目の維持発展

総合科目はほかの共通教育科目と異なり、岩手大学の学生が全学的な見地から幅広く学ぶ機会が得られるよう設定された科目で、分科会は設けてありません。総合科目も各科目代表者による企画実施委員会がその運営を担当しております。総合科目の多くはオムニバス形式で授業が実施されることが多く、多くの先生方に担当していただいております。そのため、総合科目ならではの問題も生じます。特に担当教員が定年退職などで退職する場合、その後任が確保できないことです。総合科目の実施の意義を先生方にご理解いただき、ぜひとも総合科目の維持にご協力をいただきたいと思います。

第58回 東北・北海道地区一般教育研究会 参加報告

教育評価・改善部門 江本理恵

平成20年9月4日～5日と、北海道大学で行われた東北・北海道地区一般教育研究会に参加してきました。この研究会は、第58回、つまり58年前から行われている歴史のある研究会で、東北、北海道地区の大学から200名近い参加者が集まり、教育に関して活発に情報交換が行われています。最近でこそ「FD」の名の下に、このような「大学教育」に関するフォーラムやシンポジウム、研究会が数多く開かれるようになりましたが、この研究会は、その先駆けともいえるものでしょう。

今回、全体テーマに「新たな学士課程教育の構築」を掲げ、全体会では「新たな学士課程教育の構築 -FDの義務化をめぐって-」というタイトルで、小笠原正明先生（筑波大学特任教授・元北海道大学教授）にご講演をいただきました。分科会では、「初年次教育・導入教育・キャリア教育」「高大連携・地域連携・国際連携」「検証・改善・研修」の3分科会が設定され、各大学での具体的な教育の取り組みについての話題提供が行われました。私も「推薦及びAO入試による入学予定者を対象とした入学前教育の試み」というタイトルで話題提供を行わせていただき、参加者の先生方から、今後に向けての助言をいただくことができました。

さて、実は来年、第59回の研究会を9月4日、5日（予定）に岩手大学で行います。200名近い参加者のある研究会ですので、運営には先生方のご協力が必要になります。よろしくお願いします。

専任教員 江本理恵

■全学共通教育授業公開

平成20年6月2日～6月6日の間、全学共通教育のすべての授業を公開する「授業公開」を行いました。今回は、在校生の保護者、高校生の保護者を含めた30名ほどの方が、期間中に授業を参観されました。

今回も、保護者の方々に授業モニターになっていただき、大学の授業に対する率直な意見をお伺いする機会を得ることができました。例えば、「全般的に全学共通の為教室も広く人数も多い為私語が目立ちました。授業を受ける身としては一番話し声が気になりました。」、「先生によってやり方に特徴があるので先生間でも交流してみてはいいのではないかでしょうか。」、「授業の流れが流暢で内容も深く久し振りに学者、研究者の方のお話を聞いた思いがしました。」などのご意見をいただきました。

今後も市民・保護者対象の「授業公開」を続けていきますので、全学共通教育(基礎ゼミナールを含む)をご担当の先生方には、ご理解・ご協力を願います。

■FD合宿

平成20年度8月28日、29日の1泊2日で恒例のFD合宿研修会を行いました。今年は、中教審答申(審議のまとめ)の公示にあわせ、「学士課程教育を考える－中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』を考える－」というテーマで4つのプログラムを用意しました。

プログラムⅠ、Ⅱでは、中教審答申への理解を深めながら、今後の岩手大学の教育を考えていく上での様々なアイデア(例えば「教育サバティカル制度」)や、論点(例えば「学士力で必要な能力はどう育成するのか」、「卒

業生の質保証で、卒研で本当に落とせるのか」)などについて、様々な観点から議論されました。

プログラムⅢ、Ⅳは、工学部、人文社会科学部から話題提供をいただく、という画期的な取り組みでした。ただ、初めての試みだったので、論点が絞りきれなかったところが今後の課題として残りました。

以下にアンケート結果の一部を示します。



■アンケートより(抜粋)

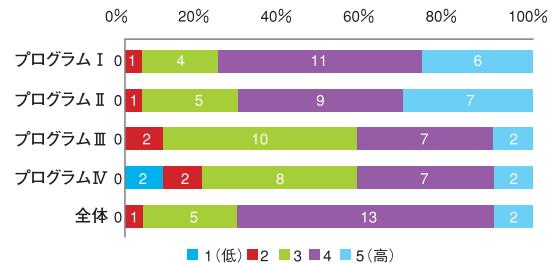
Q.各プログラムと全体について5段階で評価してください。

プログラムⅠ:中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」を学ぶ

プログラムⅡ:今、大学教育に求められているものは?

プログラムⅢ:工学部話題提供「ソフトバスエンジニアリング」

プログラムⅣ:人文社会科学部提供「総合的学部の理念と現状」



大学設置基準の一部改定：一部抜粋(平成20年4月より施行)

*教育研究上の目的の明確化(第2条の2関係)

大学は、学部、学科又は課程ごとに人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定め、好評するものとすること。

*成績評価基準等の明示等(第25条の2関係)

大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示すること。また、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客觀性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うこと。

*教育内容等の改善のための組織的研修等(第25条の3関係)

大学は、授業の内容及び方法の改善を図るために組織的な研修及び研究を実施するものとすること。

■学生による授業アンケート

教育評価・改善部門では、前後期に開講されるすべての全学共通教育科目を対象として、学生による「授業アンケート」を実施しています。そして、平成19年後期に行なった授業アンケート結果に基づいて、平成19年度後期の全学共通教育優秀授業科目を選出しました。そし

て、7月2日には、優秀授業科目担当教員と藤井学長、玉センター長、センター教員との懇談会を開催しました。

この授業アンケートの活用方法については、全国の大学で話題の1つとなっており、本学でも、要検討事項の1つです。

平成19年度後期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目一覧

■人間と文化

0008 適応の理解	早坂 浩志
0003 優秀授業科目	宇佐美 公生
0002 優秀授業科目	小林 瞳
0007 心の科学	織田 信男

■人間と社会

0042 キャリアを考える	中村 謙一
0032 社会的人間論塚	本善 弘

■人間と自然

0053 生命のしくみ	牧 陽之助
0052 生命のしくみ	松原 和衛

■情報科目

0111 情報基礎	福永 良浩
-----------	-------

■環境教育科目

0071 都市と環境	成田 榮一
------------	-------

■情報科目

0061 これからの健康科学	澤村省逸
----------------	------

■外国語科目（英語）

0314 英語コミュニケーションI（中級）	Stephen Coler
0231 中級英語	Newbury Daniel Copeland
0329 英語コミュニケーションII（上級）	Blair Benjamin Reed
0315 英語コミュニケーションI（初級）	Townsend Simon Douglas Cater
0373 英語コミュニケーションII（上級）	Blair Benjamin Reed
0207 英語B	Blair Benjamin Reed
0371 英語コミュニケーションII（上級）	Sayers Arthur Lowell
0223 英語B	Sayers Arthur Lowell
0312 英語コミュニケーションI（中級）	Newbury Daniel Copeland
0316 英語コミュニケーションII（上級）	Sayers Arthur Lowell
0347 英語コミュニケーションI（上級）	Townsend Simon Douglas Cater
0201 英語A	三浦 黙夫
0349 英語コミュニケーションI（中級）	Newbury Daniel Copeland
0332 英語コミュニケーションII（中級）	Sayers Arthur Lowell
0348 英語コミュニケーションI（上級）	Sayers Arthur Lowell
0334 英語コミュニケーションII（初級）	Newbury Daniel Copeland
0210 英語	BASANO ROBERT KEN
0221 英語B	Blair Benjamin Reed
0328 英語コミュニケーションII（上級）	Ishikawa Peggy Marrie
0380 英語コミュニケーションII（初級）	Stephen Coler
0208 英語	BIshikawa Peggy Marrie

■外国語科目（英語以外の外国語）

0475 上級日本語E	松岡 洋子
0237 中級韓国語河	河 京希
0471 中級韓国語姜	姜 奉植
0422 中級ドイツ語	山口 春樹
0464 中級中国語中	中安 美恵子
0421 中級ドイツ語	海老澤 君夫

■健康・スポーツ科目

01021 体力トレーニング	澤村省逸
01045 ゴルフ	石井 旨間
01063 卓球	大賀 圭造
01035 体力トレーニング	佐々木 優次
01023 バレーボール	大賀 圭造
01034 バドミントン	大久保 香織



部門長 村上 祐

■科目別懇談会の実施と専門基礎教育の課題

昨年に引き続いだ、専門基礎・科目別懇談会を数学・物理・化学・生物の分野別に開き、教育内容や教育体制等について意見交換しました。2年目ということもあり、それぞれが抱える問題点や課題について理解が深まりました。①工学部関係では、人文社会科学部と工学部の担当教員の間で講義内容について協議が進んでいて、到達目標および授業内容が統一されてきている、②しかし、農学部関係では、「入門」講義の内容およびオムニバス形式の講義の到達目標を、人文学部教員を含む担当教員でさらに協議する必要がある、③新入生の学力補強のための措置は各学部で実施しており(工学部では補習授業を数学・物理・化学で実施、農学部・教育学部では入門科目を開講)、学部間で協力できないか検討する(教育学部の「化学入門」「生物入門」へ農学部学生の受け入れなど)、④高校教員に協力いただいている「理系基礎学習支援講座」について、学生が参加しやすいように時間割など工夫できないか、⑤大学の理数系基礎教育の維持のためには、非常勤講師での対応も必要である、等が話し合われました。

また、センター専任教員からは、他大学の理系基礎科目で実施あるいは試行されている種々の講義方法・教育機器等が紹介されました。岩手大学においても、学習会等で有効性を検討していくことになるでしょう。

■新入生の習熟度アンケート

理系基礎の習熟度を測るために実施した数学・物理に関するアンケート調査(工学部の新入生全員と農学部の一部新入生が対象)の結果を集計し、部門会議および科目別懇談会の資料としました。高校で履修した科目であっても、入試科目でないと習熟度が低い傾向が見られ、実際に授業するときには様々な習熟状況の学生を念頭に置く必要があるとの認識を深めました。来年度はこの調査を拡大して継続することとし、数学・物理・化学について、農学部と工学部の全新入生を対象にPre-TOFEL終了後に一斉に実施する予定です。採点集計結果を、該当する講義担当者にできるだけ早い

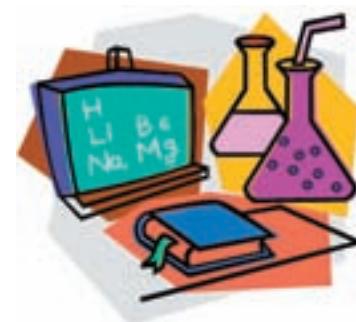
時期にお渡しますので、授業に役立てていただければと思います。

■「基礎ゼミ」の充実へ向けて

昨年から全学共通教育として開始された「基礎ゼミ」について、問題点の把握や改善策を本部門で扱うことになりました。教養教育と専門教育の両方への導入教育であるという基礎ゼミの趣旨のほかに、全学共通教育科目でありながら各学部の責任で実施しているという教育体制は、本部門の任務「全学共通教育と専門教育の連携」に適うものです。

「基礎ゼミナール情報交換会」が、各学部の実施状況や課題等を報告し合うという学部を超えた交流を目的に開催されました。ここでは特に、学部・クラスごとの講義形態や成績評価基準および「基礎ゼミ副読本」の内容・配布方法が話題になりました。

このうち「大学における学びのはじめ(副読本)」については、今年度担当した教員へのアンケート調査を参考に内容を改訂するとともに、来年度から第1回目の授業時に配布することに変更しました。また、成績評価の基準が学部・学科・クラスでかなり異なっていますので、基礎ゼミの趣旨をいっそう徹底するとともに、今後趣旨に添った成績評価のガイドラインを検討することとしました。



部門長 小笠原 義文

■ボランティア活動単位認定拡大

「コミュニティ・サポート実習」は、中期計画にある「ボランティア等課外活動の単位化」として年度計画に盛り込まれています。「コミュニティ・サポート実習」として現在単位認定しているピアソーター（学生による学生相談）と図書館サポーターズ（図書館業務サポート）に追加して、今年度から、教育学部で企画、実施している「ボランティア・チューター」が新たに了承されて4月に遡って適用することになりました。教員志望の学生に学校体験を通じて実践的指導力の育成を図るとともに、ボランティアとして学校支援を行うことを目的としている事業です。平成20年度からは、教育学部学生ばかりではなく、全学部の学生を対象として実施しています。

■自転車・バイク及び原付の駐輪指導を実施

構内駐輪環境の改善及び交通ルールの周知の観点から、強制指導的でなく大学らしく学生参加型で進めることを目標に、新年度の大学生活を始めて間もない4月21日～25日まで交通・駐輪指導を実施しました。学生生活支援部門の兼務教員と学生議会運営委員会委員、学生支援課の三者が協働で中央食堂前並びに人社会学部3号館南側を重点に行いました。指定駐輪場以外に置いたり、通路にはみ出して駐輪することが多いためマナーを充分守ることの徹底を図りました。バイク及び原付についても、正門及び館坂門を入ってすぐ左側にバイク用駐輪場があるにも拘わらず、排気音を響かせての構内通行や校舎前の駐輪を行うので、これらのことについても指導を行いました。構内に進入することの違反性や危険性を説明して、協力してもらうよう今後も粘り強く指導したいと思います。

■上田寮改修計画案の策定

上田地区にある学生寮は、築後35年の経過により老朽化が進み耐震値も標準より低く、4人部屋のため入居率も低くなっています。学生生活支援部門内に学寮改修WGを作り、個室化及び女子用部屋の増加に向けた改修を検討しています。単なるアメニティの向上で

はなく、大学の理念を体现したエコ寮をコンセプトとしてプラン策定することを決めました。専門業者にコンサルティング業務を委託し、高校生のみならず社会に対して環境政策の先頭に立つ岩手大学をPRすることにしています。完成は数年かかりますが、今年度の事業概要として基本計画協議を行い、エコマテリアルのコスト比較や耐震化の検討などを行い、基本計画書（図面、概算書）を提出する予定です。

■学生議会からの要望

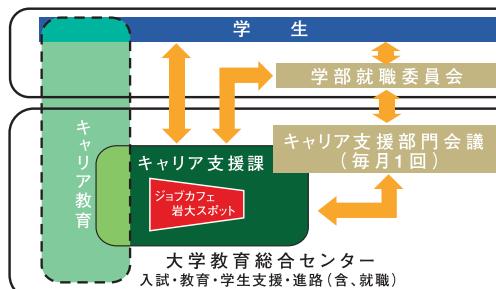
前期学生議会通常議会では、図書館の開館時間延長や自転車の駐輪指導の徹底、たばこのポイ捨てマナーを厳しくして欲しいことなどの意見・要望が出されました。図書館の開館時間については、事務職員の勤務時間などにも影響することから、情報メディアセンター図書館に検討を依頼しています。たばこのポイ捨てマナーについては「敷地内外で、タバコの吸い殻を捨てるのはやめましょう!」と注意を喚起している安全衛生委員会と連携してマナーの向上を図りたいと思います。



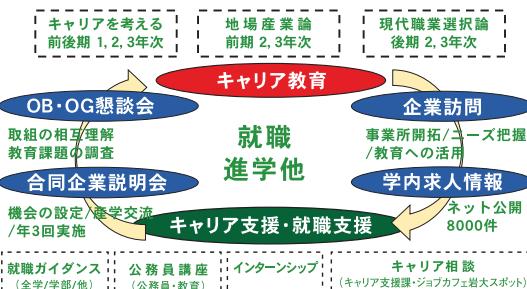
■キャリア支援部門のスタート

近年の本学の就職支援内容が、就職に直結した支援にとどまらず、「キャリアを考える」の授業をはじめ、低学年からの人生設計も含めた、いわゆる「キャリア支援」に内容が拡大してきております。これらを踏まえて、本年度より就職支援部門からキャリア支援部門に名称変更しての活動となりました。

キャリア支援の体制



キャリア支援の内容とサイクル



■キャリア教育の充実

今年度より岩手県立大学との共同で産学官連携による「地場産業・企業論」を開講しました。この講座では「地元企業の魅力探究」や自分たちの「課題整理」そして「持続可能な地域づくり」について考えます。

昨年度より実施の「キャリアを考える」は学生の認知度が高まり、前期は300名を超す履修となりました。キャリア教育では、何のために「生きる・働く・学ぶ」という目的の探究が「学びの意欲向上」につながり、どう「生きる・働く・学ぶ」という手段の探究が「意識・知識の向上」と「興味の発見」につながることを期待しております。

キャリア・アドバイザー 中村 謙一

■卒業・終了された方々と学長との懇談会実施

岩手大学を卒業・修了された皆様から、率直なご意見をいただき教育・研究・社会貢献に活かすとともに本学の改革や新たな取り組みについても積極的にお伝えし、ご助言・ご提言をいただくことを目的に懇談会を開催しました。初回の開催は盛岡市職員として活躍されている33名の方にご参加いただきました。大学からは藤井学長をはじめ理事、副学長、学部長、教職員26名が出席し意見交換を行いました。この取り組みは今後も継続の予定です。

■企業訪問実施

今年度は、従来の東北地方を中心とした企業への大学PRや採用枠の拡大をはかる取組みに加えて、首都圏を中心とした日本を代表するグローバル企業の経営動向、将来見通し、採用ニーズの把握の取り組みも実施します。

前期は製造や情報通信分野でのリーディングカンパニーを訪問しました。企業からは、長期的な視野に立ってコア人材の採用・育成に力を入れている様子が伺えました。求める人材像としては、学力の重視は当然だが、人材の質を重視する姿勢がさらに高まっており面接で長所を引き出すことや、コミュニケーション能力（チームで働く力、相手の話を受け止めその内容を伝えられる力等）、行動力（明るく、元気よく、積極的）、失敗してもへこたれないこと、などがあげられました。

■学内企業合同説明会（夏季合説）実施

本年度も昨年と同様、年3回（夏季、冬季、春季）の開催を予定しております。今年度の特長は地元志向学生への配慮と地元企業優先参加の枠を設定しているところにあります。この理由は就職、採用活動の早期化の中で地元就職の困難さや地元企業の出遅れが課題となっているためです。

今回の夏季合説では、来年4月就職の学生を対象にしており、企業の採用意欲は高いが就職環境の好転により採用決定が進み、参加学生数は伸び悩みでした。参加企業99社、参加学生149名。

全学共通教育の理念と教育目標

理 念

岩手大学は、各学部が行う専門教育とならんで、所属する学部にかかわらず全学生が共通に受けるべき教育として全学共通教育を設け、「基礎的な知識の習得を求め、多様な領域に対する学問的関心を喚起とともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養すること」をその理念としています。

この理念を実現するために、全学共通教育は岩手大学の全ての教職員の関心・責任・協力のもとに実施されています。

教 育 目 標

全学共通教育科目は、「転換教育科目」、「共通基礎科目」及び「教養科目」によって構成され、それぞれの教育目標を設定して全学共通教育の理念の具体化を図っています。また、この三つの区分の下に、それぞれに対応する授業科目群を設けて、より具体的な教育目標を明示しています。

さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development : ESD) の10年」^(注)を共通に意識することに努めています。

(注) 2002年にヨハネスブルク(南アフリカ共和国)で開催された「持続可能な開発のための世界首脳会議」(ヨハネスブルク・サミット)で日本が提案して決議に盛り込まれ、同年の国連総会においても日本の提案で採択されて、2005年から開始されている世界的な教育キャンペーン。

1. 転換教育科目の教育目標

転換教育科目は、全学共通教育へのイントロダクション、専門教育へのイントロダクション、そして大学生活へのイントロダクションの三つを役割とする科目です。転換教育科目は、大学での新たな学びについて、少人数のクラスで学生が互いに学び合うことを目指しています。また、大学での学びを社会生活への第一歩と意識して、そこでのルールやモラルも合わせて学ぶことも目標の1つです。

2. 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の社会生活を進めるうえで共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を全学生に習得させることを教育目標とする科目です。授業科目は、「外国語科目」、「健康スポーツ科目」および「情報科目」に区分されます。

3. 教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、特に上記の全学共通教育の理念における「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という3項目に基づいて、次のように設定されています。

①さまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援。

②あらゆる分野の日常生活の営みの基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い合わせ直すことができるという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援。

③多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援。

以上のような教育目標の達成をめざす教養科目は、「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、「総合科目」、「高年次課題科目」及び「環境教育科目」に区分されます。

授業実施報告

全学共通
教育授業紹介!

「地場産業・企業論」

中村 謙一(キャリア・アドバイザー)

岩手大学と岩手県立大学が、岩手県と岩手経済同友会、盛岡商工会議所のご協力を得て、産学官連携によるキャリア新講座「地場産業・企業論」を実施しました。この講座は、両大学の2、3年生を対象として、「地元企業の魅力探求」「地元就職・定着のための課題整理」「社会人基礎力の養成」を目的に実施したものです。

受講した学生約55名(履修約30名、一般学生約25名)は、達増知事をはじめ、岩手県や岩手経済同友会、県内企業の経営者からの講義や企業訪問を通して、いわての魅力、産業の課題、地元企業の魅力、企業の求める人材などを学びました。受動型授業(受信)と能動型授業(調査・分析・発信)を組み合わせた形式による講座の集大成となる成果発表会では、学生から岩手県や企業に対し学びの成果と課題を発信しました。受講学生のレポートには、「地元企業の魅力を再認識した」「地元課題の解決への参画意欲が出た」「学生間交



全学共通
教育授業紹介!

北上川を見て／聞いて／触れて／流れて／歩いた、体験報告 「北上川流域学実習」

牧 陽之助(教授 人文社会科学部専任担当)

参加学生は工と人社あわせて13人。8月2日(第1日)は一関の北上川学習交流館「あいぽーと」で、まず平山前学長の自然から治水・文化にわたる内容たっぷりの講義を聞く。2時間目、樹木葬の里研究所の千坂げんぽうさんの講義では、流域の豊かさを知ることと、賢治に近づくために「自分で考えること」を学んだ。さらに運河交流館の辺見清二さんによる「舟運史」の講義の後は、国交省の河川調査船に乗って狭窄部の約1時間半の現地視察。学習交流館のボランティアの方と一緒に講義も新鮮な体験でした。



8月7日の第2日のテーマは「川を体験する」。まずは、ボート3艇で四十四田ダムから厩橋河川公園までの川くだり。午後は「篠木仲良しクラブ」との交流会。小学3・4年生の子供たちとともに「レスキュー法」を学び、「川流れ」を体験。子供たちのパワーにさすがの岩手大生も圧倒され気味。疲れましたね。



第3日、8月8日は北上川ダム統合管理事務所でダム湖を眺めながら、塚本准教授の「旧松尾鉱山と無機汚染」、河川国道事務所の若公課長さんの「水害と河川管理」、吉田名誉教授の「川と魚・昆虫・生態系」の講義でした。午後は、大田橋下流で水生昆虫の定量採集と同定作業。



第4日・8月9日・最終日、「ボランティア活動」がテーマ。岩手・宮城内陸地震で被災された「くりこま高原自然学校」の佐々木豊志さんを講師に、活動の現場を語っていただきました。また、社会福祉協議会の菅原進さんからは「ボランティアの心得」について。

この授業は北上川流域連携交流会の協力のもとに実施可能となりました。わずか4日間でしたが、学生たちは知識ばかりではなく「体験の大切さ」を実感してくれたかな…。来年は現地の利をもうすこし活用できる工夫をします。

教育のネットワークつくりが問われるESD (Education for Sustainable Development)

山崎 憲治（教授 大学教育総合センター専任担当）

持続可能な社会を実現することが、「現代」に課せられた重要課題であることは誰もが了解している。これを実現するうえで、教育の果たす役割は極めて大きいことは間違いない。また、教育は学校教育に止まらず、家庭・社会・企業内教育まで含めたあらゆる教育を指していることも、重要な点にあげられる。同時に、ここであげた教育「現場」が相互に連携し・橋渡しを持つことも、今日問われている課題である。教育のネットワークつくりを押し進めること、海外との連携もはかりながら実践する上で、大学が大きな鍵を握っていることも、異論のないことであろう。

カリキュラムの洗い直し・精選が問われる中で、上記の課題をどのように具体化するかが求められている。今年度から二つの新規科目が立ち上がる。前期の「持続可能なコミュニティつくり実践学」と後期は「地元企業に学ぶESD」である。いずれもネットワークつくりという課題を有した科目である。それぞれの科目の特色と課題を示してみよう。

■持続可能なコミュニティづくり実践学

地域の活性化は、日本中どこでも大きな課題になっている。しかし、そこには王道はない。それぞれの地域が抱える課題を的確につかみ、対処法を独自の手法で編み出す中に、活路が開けてくる。中央に依存するのではなく、独自の主張をして、中央を巻き込んでいく。わが岩手県には地域おこしの多くの事例がある。ここに学ぶことが何よりも肝心なことだ。そこには、持続可能なコミュニティづくりという共通項が見えてくるはずだ。同時に、広い視野からこの取り組みを位置づけることも重要なである。どの地域にも克服すべき多くの課題がある。マイナスであった課題を、プラスに転じることができたとき、地域おこしは具体化し、持続可能な姿を見ることができるようになる。もう一つの特色はこの科目に招聘した講師である。岩手県の自治体の首長を講師に招いている。それぞれの自治体がどのような持続可能な社会を創ろ

うとしているか、その奮闘の現場を知り、現場から学ぼうとするものである。この「戦い」の最前線に立っている講師は現地に学ぶ豊かさを体現されている。授業の中でその豊かさを得ることができるか否か、受講者が問われる科目もある。

■地元の企業に学ぶESD

ESDは教育現場にとどまらず、社会のあらゆる場で展開される必要がある。利潤追求を第一の課題にする企業においても、積極的にESDにかかわり・実現している事例を見ることができる。むしろ、ESDの精神を持つ企業が社会をリードすることが求められている。企業活動の中にESDを組み込む、それが企業の積極性を生み、社会貢献と利潤を実現していく。このような企業が社会が育っていく。この循環が生まれるなら、Sustainabilityの実現はより確かなものになる。地元の企業から講師を招き、各企業のESD活動の現状と課題を語ってもらうことにした。各企業がもつESDのミッションに受講者は共感するに違いない。同時に授業展開のなかに「起業」の可能性を発見出来る内容をもつ科目である。「食の世界」「ものづくりの世界」「発展途上地域への貢献支援」という三つの柱をたて、講義が展開される。

ESDは、幼・小・中・高・大・専の共通課題であると共に、地域、企業、市民、社会といかに連携するか、さらに国際的な枠組みを見据えた実践が問われている。新規二科目は、これらの課題を有すとともに、その実現を受講者と共にかかる科目に育てる実践重視の科目である。大学が自治体、企業、市民とともにつくる科目として、また岩手という地域でなければ出来ない科目としての成長を期待できると確信している。

全学的知財教育

委員長 佐藤 祐介

本学における「全学的知財教育」は、文科省現代GP平成17年度採択事業であるが、その名のとおり、全学共通教育をはじめ農・工・教育・人社のすべての学部にわたって配置された授業科目において知財教育を行うもので、全国的にもユニークなものである。

授業科目としては、全学共通科目の「知財入門」、「知財ワークショップ」、学部専門科目の人社「特許法」、「商標法」、農・工「知的財産権概論」、「特許法特講」、教育「総合演習・知財教育コース」が設定されている。「知財入門」は1年生に入門的知識を授けるもので2コマのリピート授業となっており、450名ほどが受講する人気科目となっている。「知財ワークショップ」は地域に出かけて地域での知財状況を目の当たりに体験し知財を身近なものとして受け止めることを目指しており、きわめてユニークな試みとなっている（写真はその様子）。「特許法」、「商標法」は法律コース学生向けであることからして通常の知財「法学」授業と大きく異なることはないが、単なる法解釈学で終わることがないよう判例を多用した実践的方向での工夫をしている。「知的財産権概論」、「特許法特講」はさらに実践的なものであり、理系学生にとってそれほど重要でない法解釈学よりも社会に出て研究・開発に携わる場面で必要なスキルの習得を目指している。「総合演習・知財教育コース」は、子供には法律制度の知識よりも発明・創造性の心を育てることが重要であることを意識して子供に知財を教えることができる教師を育成するものである。

一般に知財教育は（知財法学教育と異なり）全国的にも始められたばかりであり、内容・方法の模索段階といえる。そのなかで、岩手大学では3年の実践経験を経て、試行錯誤のなかから一定の方向性への確信と成果を得つつある。たとえば、各科目での受講生の増加傾向や、「特許法特講」などで6割以上の学生から自らの発明提案書の提出がありそのなかの2件がパテントコンテストの応募に結びついたことなどをあげることができる。

このように岩手大学の知的財産教育は、着実に根付きつつあり、さらに継続・発展させることが望まれる。アイデアは知的財産として保護されてこそ産業振興・地域活性化に役立つのであり、岩手の地ではそのための人材育成が重要と思われるからである。



ESD 岩手県幼小中高大専ESDサミット開催

委員長 玉 真之介

7月5日（土）に、岩手県の教育史上初、また全国初の岩手県幼小中高大専ESDサミットが380名の参加を得て岩手教育会館で開催されました。これは、昨年の国際シンポジウム、国内の25大学を結集したHESDフォーラムに続く第3弾で、地域との連携・協力です。

今回のサミットで、「レイチェル・カーソンと宮沢賢治」、「フィンランドの教育とESD」という2つのテーマを県内に発信しました。また、サミット宣言を採択し、その中で岩手



県幼小中高大専ESD円卓会議の設置が謳われたことも大きな成果です。円卓会議（来年1月9日開催予定）では、サミットにおけるパネルディスカッションを基盤に「環境」と「読書」をテーマとした幼稚園から大学までの共同行動が議論されています。

サミットでは、免許更新講習にESDのテーマが必要であるというフロアーからの発言もありました。これはぜひ来年の免許更新講習で実現し、全国から教員が集まる講習にしたいと考えています。



アイアシスタント&匠の技

教育評価・改善部門 江本 理恵

■アイアシスタントによる履修申告

平成20年度後期の履修申告(履修申告期間:9月30日～10月5日)から、すべての学生がアイアシスタントを使って履修申告をしました。実施前は不安もあったのですが、OCR用紙から履修申告した学生は1名、ということで、ほぼ全員がアイアシスタントから履修申告したことになります。

学生がアイアシスタントで履修申告することにより、教員は、10月6日の午前中^{*}には、履修者名簿を手に入れられるようになりました。以前より早い時点からアイアシスタントの利用が可能になりましたので、今後もご活用をよろしくお願いします。

*履修の修正、変更等もあるので、名簿が確定するのは10月17日頃、さらに、「取り消し」があった場合には名簿が変更されます。アイアシスタントの履修者一覧では、その時点での最新のデータが反映されています。

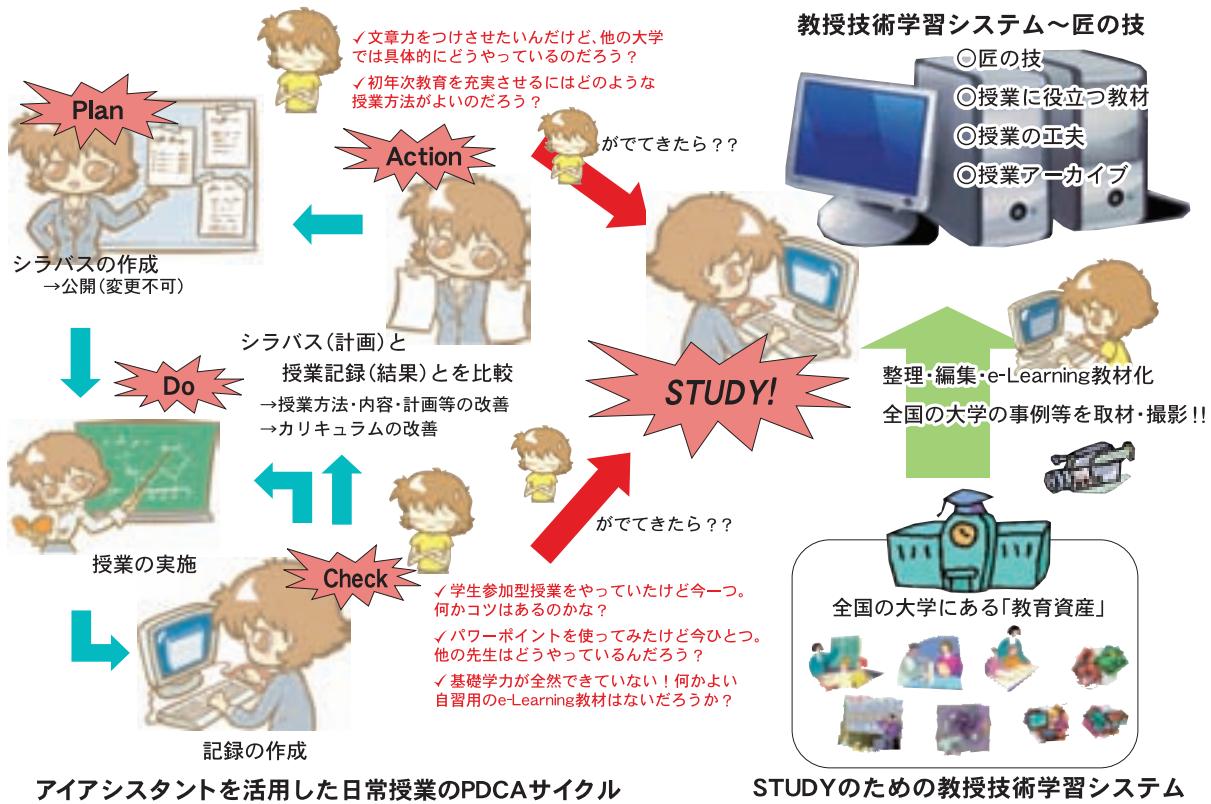
■匠の技プロジェクトの始動

大学教育総合センターでは、文科省の平成20年度特殊要因経費(政府課題対応経費)による「大学教員向け教授技術学習システムの構築－教授技術『匠の技』伝承プロジェクト」に取り組んでいます。

このプロジェクトは、授業アンケートやアイアシスタントによる「授業実施のPDCAサイクル」をさらに補強するために行うものです。このプロジェクトでは、「授業の見直し・振り返り」で発生した教員の「疑問」やより授業力を高めたい教員の要望に応えるためのシステムを構築します。そして、全体として、PDCAサイクルを拡張した「授業実施のPDCSAサイクル『計画(Plan)、実施(Do)、評価(Check)、学習(Study)、改善(Action)』」をサポートするシステムを構築し、より良い授業の実施に役立てもらうことを目指しています。

センターのFD活動に関しては、「この忙しいのに...」と思われる先生方もいらっしゃるかと思いますが、このICTを活用した授業改善システムを、教育力向上=大学教員としての価値を高めるためにご活用ください。

ICTを活用した授業改善システム概要図～授業実施のPDCSAサイクル



委員会及部門会議名簿

大学教育総合センター運営委員会委員名簿

(平成20年6月5日)

	氏 名	担当部局等
センター長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
副センター長	佐 藤 瀬	工学部
入試部門長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
全学共通教育企画・実施部門長	佐 藤 瀬	工学部
教育評価・改善部門長	後 藤 尚人	人文社会科学部
専門教育関係連絡調整部門長	村 上 祐	教育学部
学生生活支援部門長	小 笠 原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	三 輪 式	農学部
副学部長又は評議員	堀 毛 一也	人文社会科学部
	菅 原 正 和	教育学部
	藤 代 博 之	工学部
	平 秀 晴	農学部
教務関係委員長	田 口 典 男	人文社会科学部
	押 切 源 一	教育学部
	小 川 智	工学部
	橋 爪 一 善	農学部
学務部長	松 井 照 雄	学務部

大学教育総合センター会議委員名簿

(平成20年4月1日)

	氏 名	担当部局等
センター長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
副センター長	佐 藤 瀬	工学部
入試部門長	玉 真之介	理事(教育・学生担当)
全学共通教育企画・実施部門長	佐 藤 瀬	工学部
教育評価・改善部門長	後 藤 尚人	人文社会科学部
専門教育関係連絡調整部門長	村 上 祐	教育学部
学生生活支援部門長	小 笠 原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	三 輪 式	農学部
センター専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
	江 本 理 恵	大学教育総合センター
	福 永 良 浩	大学教育総合センター
学務部長	松 井 照 雄	学務部

委員会及部門会議名簿

■入試部門会議委員名簿

(平成20年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	玉 真之介	大学教育総合センター長
専任教員	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
兼務教員	古 川 務	人文社会科学部
	辻 野 哲 司	教育学部
	山 口 明	工学部
	古 濱 和 久	農学部
	北 爪 英 一	人文社会科学部
	西 崎 滋	人文社会科学部
各学部入試委員会 (正・副委員長)	遠 藤 匡 俊	教育学部
	内 山 三 郎	教育学部
	菅 野 良 弘	工学部
	大 石 好 行	工学部
	長 澤 孝 志	農学部
	原 澤 亮	農学部
入試課長	加 藤 博	学務部

■全学共通教育企画・実施部門会議委員名簿

(平成20年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	佐 藤 瀬	工学部
専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
兼務教員	海老澤 君 夫	外国語分科会
	小笠原 義 文	健康・スポーツ分科会
	鈴 木 正 幸	情報基礎分科会
	小 林 睦	思想と文化分科会
	松 岡 和 生	心と表象分科会
	丸 山 仁	公共社会分科会
	岡 崎 正 道	現代の諸問題分科会
	黒 田 栄 喜	生物の世界分科会
	西 崎 滋	自然と数理の世界分科会
	笠 場 孝 一	科学技術分科会
	河 合 成 直	環境分科会
各学部教務委員会	宮 本 ともみ	人文社会科学部
	菅 野 文 夫	教育学部
	笠 場 孝 一	工学部
	岡 田 秀 二	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

■教育評価・改善部門会議委員名簿

(平成20年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	後 藤 尚 人	人文社会科学部
全学共通教育企画・実施部門長	佐 藤 瀬	工学部
専任教員	江 本 理 恵	大学教育総合センター
	福 永 良 浩	大学教育総合センター
兼務教員 (学部選出委員)	砂 山 稔	人文社会科学部
	西 牧 正 義	人文社会科学部
	名古屋 恒 彦	教育学部
	川 口 明 子	教育学部
	八 代 仁	工学部
	鈴 木 正 幸	工学部
	立 石 貴 浩	農学部
	橋 本 良 二	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

■専門教育関係連絡調整部門会議委員名簿

(平成20年6月5日)

	氏 名	担当部局等
部門長	村 上 祐	教育学部
専任教員	山 崎 憲 治	大学教育総合センター
兼務教員	山 内 茂 雄	人文社会科学部
(各学部教務委員会選出教員)	犬 塚 博 彦	教育学部
	小 川 智	工学部
	河 合 成 直	農学部
学務課長	今 野 悟	学務部

■学生生活支援部門会議委員名簿

(平成20年4月1日)

	氏 名	担当部局等
部門長	小 笠 原 義 文	教育学部
兼務教員	川 本 栄 三 郎	人文社会科学部
(各学部学生委員会選出教員)	清 水 茂 幸	教育学部
	伊 藤 歩	工学部
	築 城 幹 典	農学部
能 登 恵 一		人文社会科学部
菊 地 悟		教育学部
一 ノ 瀬 充 行		工学部
谷 口 和 之		農学部
学生支援課長	白 崎 隆 典	学務部

■キャリア支援部門会議委員名簿

(平成20年6月5日)

	氏 名	担当部局等
部門長	三 輪 式	農学部
兼務教員	丸 山 仁	人文社会科学部
(各学部就職委員会選出教員)	大 河 原 清	教育学部
	小 川 智	工学部
	木 村 伸 男	農学部
キャリア支援課長	松 井 照 雄	学務部長(兼)



| 編 | 集 | 後 | 記 |

鮭が中津川を上り、白鳥の声がきこえる季節になりました。もうすぐ平成20年も終わりますね。

来年はどんな年になるのかな。明るい話題の多い年になるとうれしいですね。



工房うさぎごや

erudio 9

[2008年11月15日発行]



国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター

Iwate University : University Education Center

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

【入試部門】 tel.019-621-6926

【全学共通教育企画・実施部門】 tel.019-621-6925

【教育評価・改善部門】 tel.019-621-6924

【専門教育関係連絡調整部門】 tel.019-621-6925

【学生生活支援部門(学生支援課)】 tel.019-621-6058

【就職支援部門(就職支援課)】 tel.019-621-6059

【部門共通】 fax.019-621-6928

電子メール uec@iwate-u.ac.jp

Webサイト <http://uec.iwate-u.ac.jp/>

